タイの教員及び学生を対象とした着物文化の発信のための浴衣着装ワークショップ

横浜国立大学教育学部（非）
大矢　幸江
横浜国立大学教育学部
薩本　弥生
元山梨県立大学人間福祉学部（非）
深海　康子
茨城キリスト教大学生活科学部
扇澤美千子
山梨県立大学人間福祉学部
齊藤　秀子

1. 緒言

昨今はインターネットが普及し世界が瞬時に繋がる時代となっている。情報のみならず人やモノの移動を含むグローバル化が進んでおり、文化の相互交流の機会は、これからも一層増していくと考えられる。外国人の日本文化への関心は高いが、ポップカルチャーが中心で伝統文化への理解は十分でなく、その発信方法について検討する必要があった。このような背景から、著者らは日本の伝統文化のひとつである着物について着装も含め、理解するための新しい教育デザインが必要となってきていると考え、国内外での浴衣着装ワークショップを行うことによって教育プログラムを検討し、開発を進めてきた[1)~2)]。これは、海外の中学・高等学校生徒、大学生、社会人を対象として、着物の中で最もカジュアルで身近な浴衣を取り上げ、その着装を学び、さらに着物文化に関わる講義を通して日本の伝統文化である着物文化に対する理解を深めるワークショップの実践とその効果検証からなる活動である。この活動により、海外の人たちの日本理解とともに文化交流への貢献も期待できることが明らかとなった。

これまで海外での活動では、徐々に現地の日本語教員等を窓口にして現地の学生を対象にワークショップを企画し、実践するようになった。日本語教員は語学の専門家ではあるが、日本の文化面の知識を深める機会が十分でなくその機会を欲していたためである。参加した教員や学生は、日本の伝統文化に触れ、着物文化に対する理解や興味関心を深め浴衣を着装することができた高揚感を感じていた[2)]。ワークショップによる海外での日本理解と文化交流の効果を実感してきた。

2018 年は、タイのコンケン大学教育学部より招聘され、日本語教育ワークショップとして浴衣の着装ワークショップを行う機会を得た。コンケン大学において日本語教育に携わり、授業で浴衣の着装実践も行っている教員より、タイで日本文化を伝えるために本研究プログラムの浴衣着装ホームページのタイ語版を作成したいという要請があり、本ワークショップの実践へとつながった。対象者(教員と学生)の教員は、日本文化の基本的な知識があり興味関心も高い。学生は、日本語および日本文化について基本的知識を学んでおり、浴衣の着装経験がある学生も多い。教員、学生ともに、さらに専門的な知識を深めたいという高い意欲があるという。本ワークショップにより一層の日本文化への理解と興味関心が高まることが期待される。

本研究では、タイにおけるワークショップが参加者の日本の伝統文化である着物文化に対する理解を深め興味関心を高められたか、さらに日本理解と文化交流への興味を高められたかを検証することを目的とする。参加者の属性が教員か学生かによる相違にも着目し、本教育プログラムの効果を検証する。

なお、本研究に先立ち、横浜国立大学倫理委員会に申請し、承認を得た。タイのコンケン大学の担当教員には、研究の趣旨を伝えインフォームドコンセントを取り、学生及び参加教員には担当教員を通じてアンケートへの協力を依頼し、写真撮影の許可を得た。

2. 研究方法

2-1　着装ワークショップ実施方法

2018 年 2 月にタイのコンケン大学において浴衣の着装ワークショップを実施した。調査対象は日本語教員 12 名(男性 1 名、女性 11 名)、コンケン大学日本語学科の大学生 20 名(男性 4 名、女性 16 名)の合計 32 名である。教員は教員研修会としての位置づけで参加し、学生は日本文化の学習として参加している。平均年齢は教員 30.9 歳、大学生 20.4 歳であった。ワークショップ 6 時間の内容および流れを表 1 に示す。

表 1　ワークショップの内容と流れ（6 時間）

午前	1. 事前アンケート
	2. 講義（図 1） ① 着物文化の紹介(振袖と紋付袴の解説を含む) ② 平面構成、もったいない精神、浴衣に関して ③ 着物の模様について
	3. 着物の模様ワーク(図 2)
午後	4. 浴衣着付け示範と浴衣の着装体験(図 3)
	5. 盆踊り体験(図 4)
	6. 事後アンケート

図 1 振袖の紹介

図 2 着物の模様ワーク

図 3 浴衣の着装体験

図 4 盆踊り体験

午前は講義室にて座学の学びとして、講義と模様ワークにより知識を深め、午後はホールにて浴衣着装実習および着装感を味わう活動をして技能を学んだ。これまでの実践で効果的であった、知識を学び理解してから技能実践を行うという流れでの実践である。午後の着装感を味わう活動では、講義で学んだ浴衣の着装場面の中から盆踊りを取り上げ追体験させた。踊ることで浴衣着装時の立ち居振る舞いを実感できる。学生は日本語の学習目的もあるため、ワークショップの使用言語は日本語を用い、現地教員がタイ語に翻訳して説明を加えた。各々の活動内容は、午前の着物文化の紹介では、着物と浴衣に関する講義に加え、実物に触れてもらうため振袖(図 1)や紋付袴を参加者の代表に着装してもらい、実装した姿を見せながら解説を行った。着物の模様ワークに先立ち、代表的な伝統模様の意味と背景について紹介した。模様ワークでは子供の成長を祝う祝い着と、カードのセット(祝い着 1 枚につき 10~25 枚のセットで祝い着の中にある模様と意味が記載されている)を用いた。参加者は 1 班 4，5 人の数班に分かれ、実物の祝い着を広げて、カード中の模様を祝い着の中から探し出し、その意味を確認した。全てのカードが着物のどこにあるかを探せたら、各自、自分の気に入った模様を決め、選んだ理由とともにワークシートに記載する。グループでは祝い着を象徴する模様や、そこに込められた願いを話し合い、最後に結果を発表して全体で共有した（図 2）。午後の着装実習では浴衣の着付けの示範を見た後、グループに分かれて、着装の仕方を指導する TA のサポートのもと、自分で浴衣の着装を行った（図 3）。着装後、日本の夏の風物詩である盆踊り(炭坑節)を輪になって踊った（図 4）。

2-2　調査方法と内容

アンケート調査の使用言語は英語で、海外向けの英語版アンケートを用いた。事前アンケートでは、全 37 項目のうち日本文化の認知度と着物や浴衣の着装を含む学びたい日本文化については 5 件法（5：高い認知意欲や関心⇔1：低い認知意欲や関心）で設問し、着物文化に関する経験や知識、着装意欲については 2 件法（1：経験あり、知っている「はい」⇔2：経験なし、知らない「いいえ」）で、日本文化の情報源については多重回答（あてはまるものに○）で回答させた。事後アンケートは、着装感、着付けに対する興味・意欲、着付け方の理解・習得についての全 25 項目を、5 件法（5：とてもそう思う、とてもできる⇔1：全くそう思わない、全くできない）で回答させ、合わせて自由記述にも回答させた。

着物の模様ワークで使用したワークシートも調査の対象とした。ワークシートには、自分が気に入った模様の名称と選んだ理由を記入させ、模様のスケッチを描かせた。

2-3　解析方法

ワークショップ前後のアンケート調査及びークシートを回収し集計した。5 件法の回答は、量的に扱える間隔尺度として扱った。質問の回答結果を基礎統計量と回答割合の集計で全体的な傾向を把握した。解析ソフトには、SPSS Statistics20 を使用した。有意水準 p ＜.05、p ＜.01、p ＜.001 で有意差検定をした。また、自由記述やワークシートの回答内容から対象者の傾向を検討した。

3. 結果および考察

3-1　事前調査

日本文化の認知度についての結果を図 5 に示す。全 14 項目の平均値は、アニメ、漫画、キャラクター、ファストファッションなどのポップカルチャーや、和食、日本茶、調味料などの認知・関心度が全体平均で 4.0 以上と高かった。華道、茶道、和楽器、伝統芸能など日本の伝統文化の認知度は教員が高く、学生は低かった。特に華道と和楽器において教員が学生に比べ有意に高い値を示した(p<0.05)。

日本文化の情報源についての結果を図 6 に示す。教員、学生ともにインターネット、テレビからの取得が高くなっている。特に学生のインターネットは 100%であった。

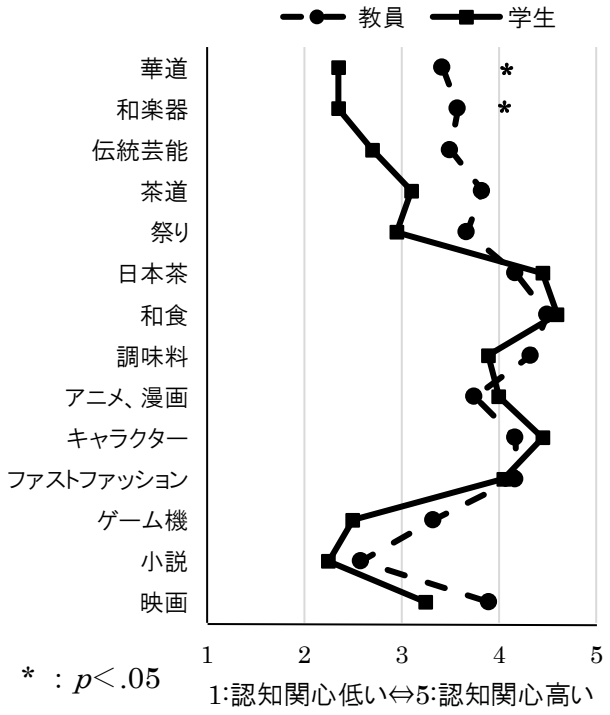


図 5 日本文化の認知関心度

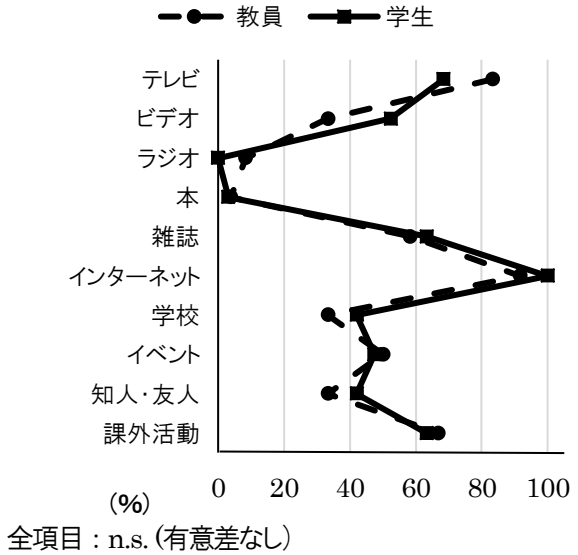


図 6 日本文化の情報源の取得割合

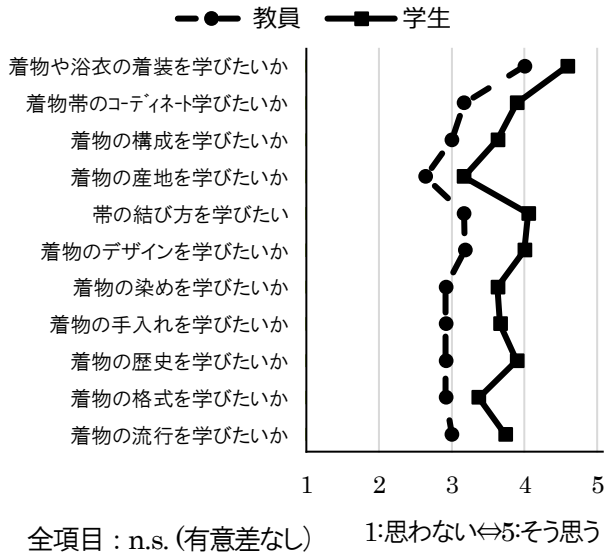


図 7 学びたい着物文化

すなわち学生全員がインターネットを用いて能動的に情報を検索しているといえる。このことからポップカルチャーを中心に日本文化への関心は高いと推察される。

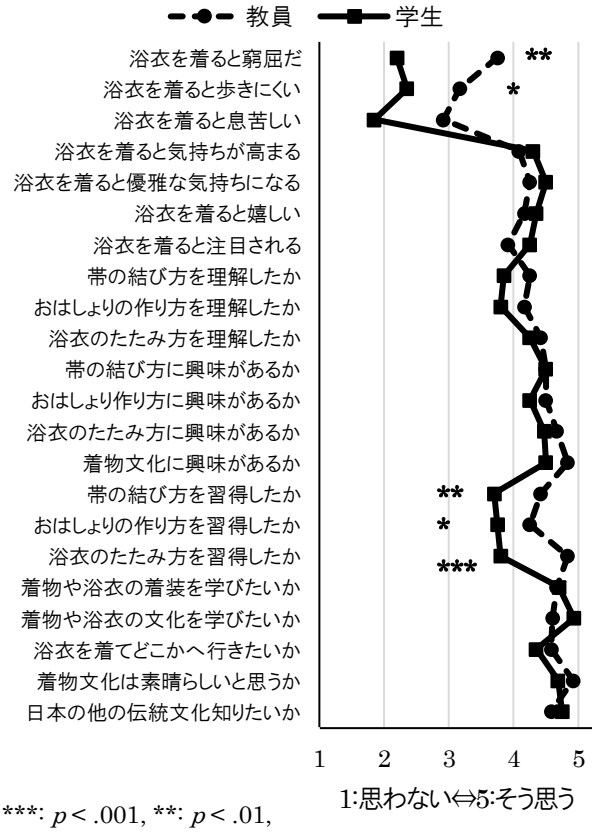
日本文化の中でも着物文化に関する経験や意欲については、「着物や浴衣を聞いたことがあるか」(「はい」の割合：教員 91.6%、学生 94.4%)、「着物や浴衣を着たことがあるか」(「はい」：教員 91.6%、学生 100%)、「着物や浴衣の着装を学びたいか」(「はい」：教員 100%、学生 100%)、となった。教員、学生ともに 90%以上の高い割合で着物や浴衣について聞いたことや着たことがあり、着装は全員が学びたいと回答した。

学びたい着物文化（図 7）については、着物や浴衣の着装、着物と帯のコーディネート、帯結び、デザイン、歴史、流行への学習意欲が高く、全ての質問項目で教員より学生の意欲のほうが高かったが、有意差はなかった。教員、学生ともに事前の段階で既に着物文化への知識と経験があり、日本語を学ぶ学生たちは教員よりも着物文化の学習意欲が高く、ワークショップへの期待感が強いことがわかる。

3-2　事後調査

3-2-1　事後の着装感、理解・習得、学習意欲

事後アンケートの着装後等の自己評価について、全 22 項目の結果を図 8 に示す。教員、学生ともに平均値 4.0 以上の高い値を示したのが、着装して優雅な気持ちになるや嬉しいなどの「高揚感」、たたみ方の理解、着物文化への興味などの「技能の興味や着装技能の理解」、着物文化を学びたい、着装を学びたいなどの「学習意欲」であった。一方、浴衣を着ると窮屈(p<0.01)、歩きにくい(p<0.05)の「拘束感」は有意差が見られ、学生は教員よりも有意に低く、拘束感をあまり感じておらず、教員の方が苦しさを感じていた。帯の結び方の習得(p<0.01)、おはしょりの作り方の習得(p<0.05)、浴衣のたたみ方の習得(p<0.001)の「着装技能習得」については教員が有意に高く、教員は着装ができると自己評価していた。



***: p < .001, **: p < .01,
*: p < .05

図 8 事後の着装感、理解・習得、学習意欲

3-3　事前事後の変化とワークショップの効果

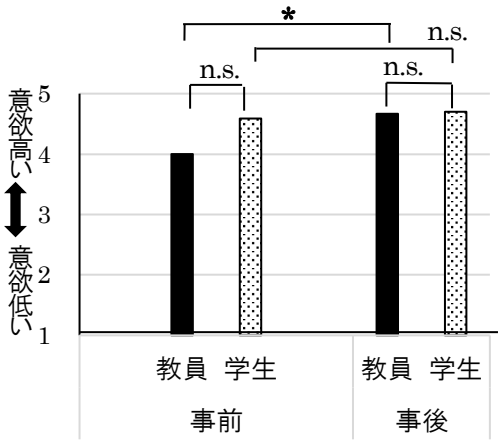
3-3-1　ワークショップ前後の着装意欲

ワークショップの前後で「着物や浴衣の着装を学びたい意欲」(5 件法)の比較をした結果を図 9 に示す。教員、学生ともに事後に意欲が高まった。教員と学生間では事前、事後ともに有意差は見られなかったが、教員は事後に有意に意欲の高まりが見られた(p<0.05)。学生は事前から着装を学びたいという高い意欲があったため事後の伸びは小さく、教員は学生より高まりが大きく、それが事後の有意差となって現れたと考えられる。

3-3-2　事前事後の因子分析

ワークショップが教員や学生にどのような影響を与えたのかを明らかにするために、授業前 11 項目(図 7)と授業後の 22 項目(図 8)に対して因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行い要因因子を抽出した。α係数を算出し内的整合性を検討した。因子負荷量が.35 に満たない項目を除外し因子分析を行ったところ、事前調査は 1 因子、事後調査は 5 因子が抽出された。因子分析の最終的な結果と因子負荷量について事前を表2、事後を表3に示す。

事前項目の 1 因子は、着物文化への学習意欲であり「事前意欲」と命名した。事後項目の第 1 因子は、おはしょりの作り方や帯結びへの興味などで「興味関心」、第 2



*　: p <.05、n.s.(有意差なし)

図 9 事前と事後の着装を学びたい意欲

因子は、おはしょりの作り方や帯結びの理解などで「技能理解」、第3因子は、歩きにくい、窮屈な感じなどで「拘束感」、第4因子は、おはしょりの作り方や帯結びの習得などで「着装習得」、第5因子は、浴衣を着て注目される、嬉しい気分などで「高揚感」と命名した。

3-3-3　因子間の相互相関

事前事後の全6因子の相関関係を見るために相関分析した結果が表4である。

事前の学習意欲が着物文化に対する興味関心と有意に高い相関が見られた(p <0.001)。興味関心は技能理解と有意な相関(p<0.01)が見られ、着装習得は拘束感と有意な相関(p<0.01)が見られた。また、有意差はないが高揚感と着装習得には負の相関が見られた。

3-3-4　全体の共分散構造分析結果

ワークショップの効果を検証するために因子分析で得られた因子とその相関関係を元に、共分散構造分析(パス解析)を行った。因子分析の結果から得られた因子を潜在変数とし、各因子を構成する質問項目のデータを観察変数として解析を行った結果を図 10 に示す。パス解析の適合度指数、CFI=0.932、GFI=0.660、AGFI=0.570、RMSEA=0.077 をそれぞれ示し、適合度指数は妥当と言えた。

パス解析から参加者のどのような要因が着物文化への興味関心に影響しているかを検証する。「事前意欲」から事後の「興味関心」因子への有意なパス（係数 0.69、有意確率 p<0.001）が引け、事後の「技能理解」から「興味関心」因子への有意なパス（係数 0.57、有意確率 p <0.001）が引けた。これは、ワークショップ前の着物文化を学びたい、着装したいという意欲が事後の興味関心を高めるとともに、着装への技能理解も興味関心を有意に高めたと言える。しかし、「高揚感」からは「着装習得」へのパスは引けず、「高揚感」から「技能理解」のパスは引けたが有意にはならなかった。浴衣を着装した高揚感はあるものの(図8)、そのことが技能理解や興味関心と結びついていないと考えられる。「技能理解」から「着装習得」へのパス（係数0.33）と「着装習得」から「拘束感」への有意なパス（係数0.53、有意確率 p<0.01）が引けた。着装への技能理解が着装習得を促し、さらに着装習得によって拘束感を強く感じるようになることがパス解析から明らかとなった。

表２　事前調査の因子分析

	第1因子	因子名
着物や浴衣の着装を学びたいか	.98	事前意欲
着物の歴史を学びたいか	.95	
着物のデザインを学びたいか	.94	
帯の結び方を学びたい	.93	
着物や帯のコーディネートを学びたいか	.92	
着物の格式を学びたいか	.92	
着物の染めを学びたいか	.91	
着物の産地を学びたいか	.91	
着物の手入れを学びたいか	.89	
着物の構成を学びたいか	.88	
着物の流行を学びたいか	.85	
累積寄与率	83.1%	

表３　事後調査の因子分析

	第１因子	第２因子	第３因子	第４因子	第５因子	因子名
おはしょりの作り方への興味	**.92**	.09	-.02	-.02	.02	興味関心
浴衣のたたみ方への興味	**.88**	.16	.05	.12	-.10	
帯の結び方への興味	**.79**	.25	.08	-.18	.17	
おはしょりの作り方の理解	-.07	**.98**	.02	.03	.02	技能理解
帯の結び方の理解	.03	**.93**	-.09	.09	-.18	
浴衣のたたみ方の理解	.36	**.59**	.04	.05	.17	
歩きにくい感じ	-.08	.02	**.92**	-.18	.09	拘束感
息苦しい感じ	.02	-.09	**.79**	.17	.03	
窮屈な感じ	.27	.03	**.73**	.04	-.25	
おはしょりの作り方の習得	-.00	.17	-.12	**.95**	.26	着装習得
帯の結び方の習得	-.06	.09	-.08	**.90**	-.06	
浴衣のたたみ方の習得	.09	-.22	.36	**.69**	-.04	
浴衣を着て注目される	-.09	-.02	.07	.23	**.95**	高揚感
浴衣を着て嬉しい気分	.12	.05	-.09	-.06	**.79**	
浴衣を着て優雅な気分	.24	-.40	-.20	-.06	**.55**	
浴衣を着て気持ちが高まる	-.34	.11	.43	-.13	**.46**	
累積寄与率					77.11%	

表４　事前事後因子間の相関係数

	1	2	3	4	5
1 事前意欲					
2 興味関心	.63***				
3 技能理解	.11	.36*			
4 拘束感	-.30	-.08	.13		
5 着装習得	-.16	.27	.13	.40*	
6 高揚感	.22	.06	.17	-.14	-.31

***: p< .001,　*: p< .05

※ 縦軸の数字が横軸の数字に対応する

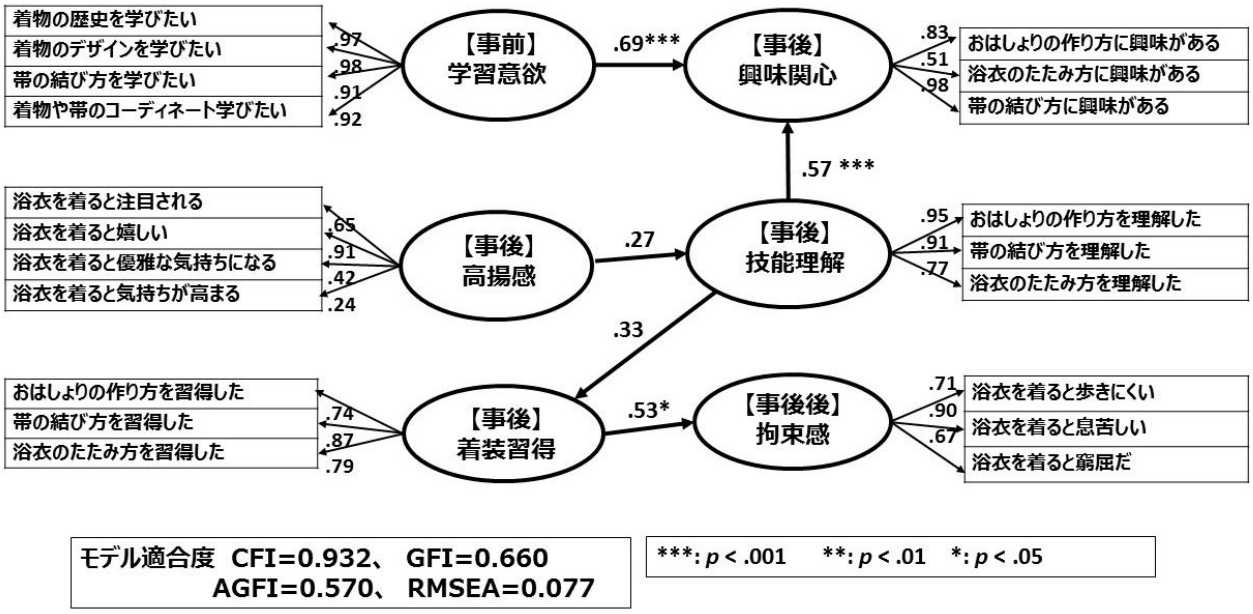


図 10 全体の共分散構造分析結果

3-3-5　参加対象者の比較

教員と学生では、ワークショップへの参加背景が異なっていた。そのことが学習意欲や興味関心に影響を与えていると考えられる。そこで因子分析による因子得点を元に、対象者別の相関分析を行った。その結果について教員を表 5、学生を表 6 に示す。

教員は、事前の意欲と興味関心に有意な相関(p <0.001)、興味関心は技能理解と有意な相関(p<0.01)が見られ、全体と同様の結果であった。全体との相違点としては、技能理解と着装習得に高い相関(p <0.001)が示されていた。

一方、学生は事前の意欲と興味関心に有意な相関(p <0.05)が見られたものの、興味関心は技能理解と有意な相関は見られなかった。そして、高揚感と技能理解間に有意な相関が見られた(p<0.05)。全体や教員の結果からは見られなかった傾向である。そこで、対象者による影響の違いを共分散構造分析によって比較した。

表 5　教員の因子間の相関係数

	1	2	3	4	5
1 事前意欲					
2 興味関心	.91***				
3 技能理解	.48	.71**			
4 拘束感	-.48	-.45	.11		
5 着装習得	.22	.39	.85***	.35	
6 高揚感	-.03	-.17	-.43	-.05	-.48

***: p< .001, **: p< .01

※ 縦軸の数字が横軸の数字に対応する

表 6　学生の因子間の相関係数

	1	2	3	4	5
1 事前意欲					
2 興味関心	.53*				
3 技能理解	-.09	.17			
4 拘束感	-.07	.11	.10		
5 着装習得	-.17	.20	-.21	.13	
6 高揚感	.28	.24	.48*	-.03	-.04

*: p< .05

※ 縦軸の数字が横軸の数字に対応する

3-3-6　教員の共分散構造分析結果

教員の共分散構造分析を因子分析で得られた因子とその相関関係を元にモデルを検討した。因子分析の因子を潜在変数、各因子の質問項目を観察変数として解析を行った最終結果を図 11 に示す。パス解析の適合度指数は、CFI=0.774、GFI=0.593、AGFI=0.301、RMSEA=0.309 をそれぞれ示し、適合度指数は RMSEA＜0.1 の適合範

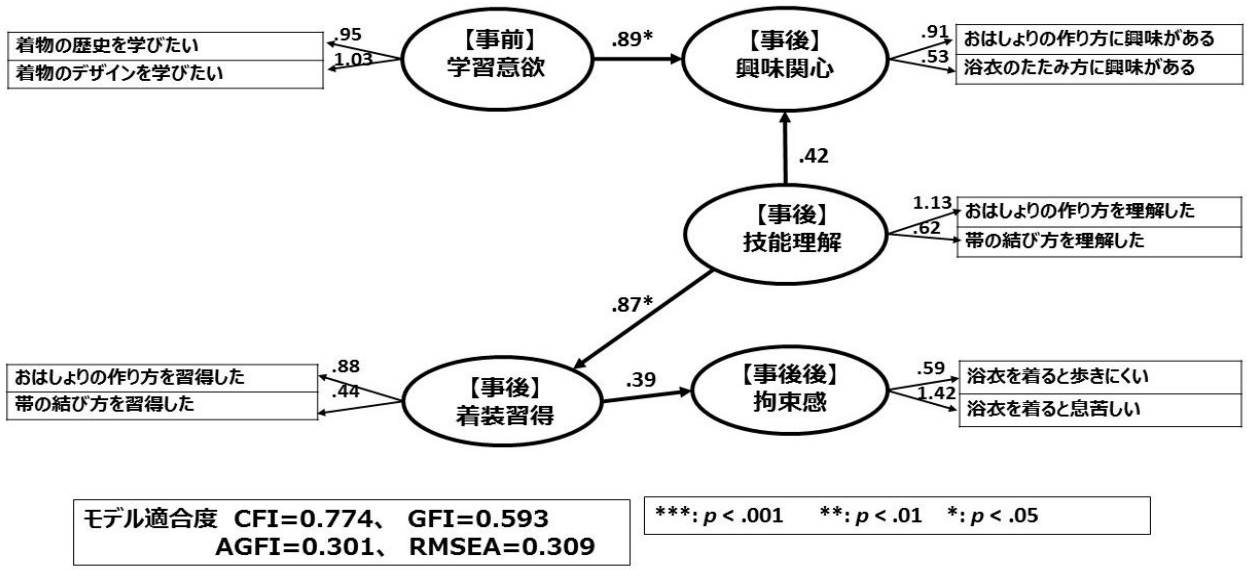


図 11 教員の共分散構造分析結果

囲を超えたので適合度は低い。サンプル数が少ない影響と考えられる。標準化係数、有意確率から因果関係を検討した。

「事前意欲」から事後の「興味関心」因子への有意なパス（係数 0.89、有意確率 p<0.01）が引け、事後の「技能理解」からも「興味関心」因子へのパス（係数 0.42）が引けた。事後の「技能理解」から「着装習得」への有意なパス（係数 0.87、有意確率 p <0.05）も引けた。全体の結果と同様に、事前の着物文化の学習意欲が事後の興味関心を高め、着装の技能理解も興味関心を有意に高めた。また、技能理解が着装習得を高めているという関係が明らかとなった。一方、「高揚感」から「技能理解」へのパスは引けなかった。相関分析でも負の相関が示されており、教員にとって高揚感はむしろ技能理解への妨げになっている可能性がある。「高揚感」は他の因子とも負の相関が示されていたが有意でないためパスは引けないという結果となった。

3-3-7　学生の共分散構造分析結果

学生の共分散構造分析を因子分析で得られた因子とその相関関係を元にモデルを検討した。因子分析の因子を潜在変数、各因子の質問項目を観察変数として解析を行った最終結果を図 12 に示す。パス解析の適合度指数は、CFI=0.813、GFI=0.650、AGFI=0.474、RMSEA=0.197 をそれぞれ示し、適合度指数は RMSEA＜0.1 の適合範囲を超えたので適合度は低い。サンプル数が少ない影響と考えられる。標準化係数、有意確率から因果関係を検討した。

「事前意欲」から事後の「興味関心」因子への有意なパス（係数 0.71、有意確率 p<0.001）が引け、事後の「技能理解」からも「興味関心」因子への有意なパス（係数 0.52、有意確率 p <0.001）が引けた。事後の「高揚感」から「技能理解」へのパス（係数 0.51、有意確率 p<0.05）も有意となった。事前の着物文化の学習意欲が事後の興味関心を高め、着装の高揚感が技能理解を高め、さらに技能理解が興味関心を有意に高めているという関係が明らかとなった。一方、「技能理解」から「着装習得」へのパスは引けなかった。「着装習得」と「技能理解」は相関分析でも負の相関となっているが有意でなかった。学生は着装による高揚感は高まったものの、着装習得したと認識するまでは至らなかったようだ。高揚感から着物文化への興味関心の高まりは示されているという結果は、国内の生徒への実践[3]の傾向と類似していた。

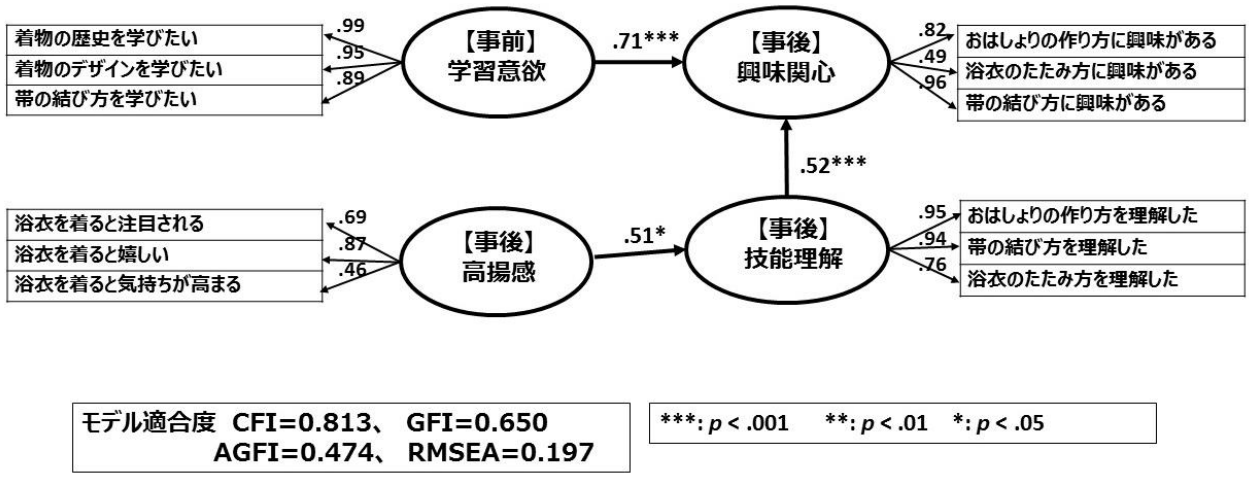


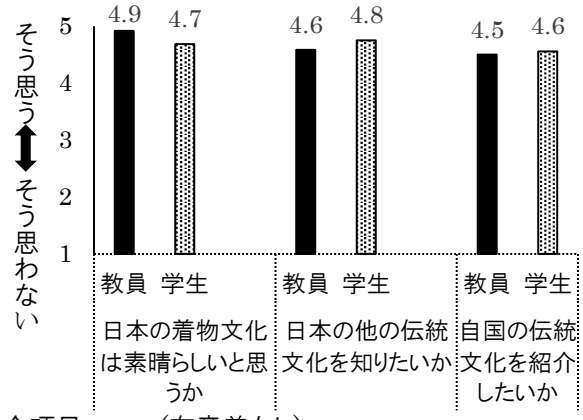
図 12 学生の共分散構造分析結果

3-3-8　日本とタイの伝統文化に対する意識

日本の着物文化やそれ以外の日本の伝統文化、自国タイの伝統文化についての意識を回答した結果を図 13 に示し、知りたい具体的な伝統文化の内容を表 7 に示す。

全ての項目で平均値が 4.5 以上と高くなり、教員と学生間の有意差はなかった。タイの教員、学生ともに着物文化を素晴らしいと思う気持ちや他の日本の伝統文化を学びたいという気持ちを抱いている。日本の着物文化を素晴らしいと思うのは、学生より教員のほうが高いが、日本の伝統文化を学びたい気持ちは、学生の方が高かった。その学びたい日本文化の内容は、茶道や日本料理に関するものが多く、学生はアニメなどのポップカルチャーへの関心も高い。学生は日本の様々なことをもっと知りたい、学びたいという意欲が高いと考えられた。

また、日本文化についてだけでなく、自国タイの伝統文化について、海外の人に紹介したいと考えていた。紹介したい内容としてタイダンスやドレス、シルク等多種多様の文化が記述されていた。学びたい、紹介したいともに高いことから異文化を持つ人と積極的に関わり、文化交流をしたいと感じていると考えられた。本調査ではタイの文化についての関心を事前調査していないが、事後調査からは自国の文化の紹介したい平均値は、教員(4.5)、学生(4.6)と高い平均値を示した。今回のワークショップによって、日本の文化について学ぶことで、自国の文化に対して改めて目を向ける機会となった可能性がある。着物文化に触れ素晴らしいと感じた経験や盆踊り体験から、自国のタイ文化へ思いを馳せ歴史や舞踊等について、他国との違いを感じ大切にしたいなどの思いを深める機会となったと捉えた。



全項目：n.s.（有意差なし）

図 13 教員、学生の伝統文化についての意識

表 7　学びたい、紹介したい伝統文化の内容

学びたい日本の伝統文化		紹介したいタイ文化	
教員	学生	教員	学生
茶道(3), 生花(2), 日舞(2), 華道(1), 浴衣(1), 書道(1), 和太鼓(1), 和菓子(1)	茶道(8), 日本料理(8), 踊り(1), 浴衣(1), アニメ(1), 漫画(1), 風呂敷(1), 書道(1), 琴(1), 生花(1), 柔道(1), 弓道(1)	タイダンス(1), ドレスやシルク(1), タイ料理(1),	タイダンス(5), ドレスやシルク(4), タイボクシング(4), タイ料理(3), フルーツカービング(2), タイ模様(1), タイ語(1)

※（ ）内の数字は人数を示す

3-3-9　着物の模様ワーク

ワークショップの午前の活動では着物文化への興味を深めてもらうために、着物の模様ワークを行った。模様ワークで使用したカードの模様は植物、自然、動物、器物、幾何学など [4]に分類される。ワークシートに記載された、気に入った模様の名称を分類ごとにまとめ(表 8)、模様のスケッチ及び理由の例を図 14 に示す。

最も多く選ばれていた模様は植物に関するもの（30%）で、美しさ(花)、日本を思う(桜)などが選んだ理由であった。自然の模様を選んだ理由には、平和(青海波)などが記され、動物の理由には、美しく成長する(蝶)や強さ(鷹)が、器物や幾何学には、幸せ長寿(亀甲)、富(宝船) が記述された。選ばれた模様として多かったものや選んだ理由は国内の実践時と同じ傾向 [5]が伺えた。模様ワークにより、それぞれの模様には着物を美しく見せる以外の意味があることを知り、美しいもの、平和を表すもの、強さへのあこがれなど模様に込められた思いを感じ取っていた。その感じ方は日本での実践と一緒であると言えた。

表 8　気に入った模様の分類と模様の名称

分類	模様の名称と人数
植物 30%	桜(2)、牡丹(1)、桔梗(2)、梅(2)、紅葉(3)、桐(2)、
自然 10%	青貝波(3)、波(1)
動物 25%	蝶(4)、鷹(4)、鶴(1)、竜(1)
器物 25%	兜(2)、宝船(2)、紐飾り(2)、火炎太鼓(2)、手鞠(1)、宝尽くし(1)
幾何学、他 10%	七宝(1)、亀甲(1)、菱(1)、花菱(1)

※（ ）内の数字は人数を示す

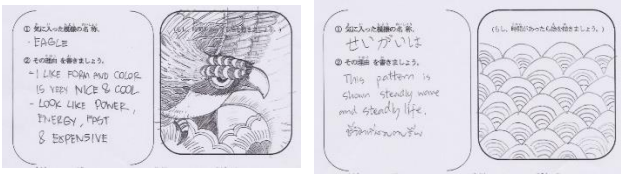


図 14 選んだ模様のスケッチとその理由

3-4　全体への効果および教員と学生の属性による比較

教員、学生とも事前に着物文化に触れたことがあり学習意欲も高かった。ワークショップによってさらに興味関心を高めることができていた。相関分析や共分散構造分析によって、興味関心を高める要因の因果関係や教員と学生の属性による違いの検証を行った。その結果、対象者全体としては、事前の学習意欲が高いことが着物文化への興味関心をより高めること、着装の技能を理解することで興味関心が高まることが明らかとなった。また、着装習得と拘束感には有意な相関が見られ、教員は着装技能の習得が学生より高く、技能習得はできているが拘束感を感じていることがわかった。

この着装技能について、一般的に着装の熟練者は美しくかつ苦しくない着装の習得ができているが、着装技能が劣ると着崩れを防ぐために帯や紐をきつく締めすぎることが多い。また、初心者は帯や紐をしっかり締めることができずに着崩れしやすい傾向がある。学生は初心者がほとんどで、教員は着装経験があっても熟練はしていないと考えられた。着装習得と拘束感の有意な関係から、学生の着装技能習得の未熟さが着付けのゆるさに繋がったと思われた。学生は、着装技能が教員よりも低く窮屈な感じや歩きにくさ、息苦しさなどの拘束感を感じにくかったようだ。教員は着装技能の習得はできているが拘束感を感じていたことから、着装の熟練者に達する技能までは習得されていないと推察された。

教員、学生ともに着物文化への興味関心は高まったが、その道筋は異なっていた。教員は、学びとして理解を深めることから興味関心を高め、技能を理解することから着装の習得に至っているのに対し、学生は高揚感から技能の理解を深め興味関心を高めていた。そして、両者とも事前の学びへの意欲も大事な要因となっていた。学生が高かった高揚感については、相関分析により着装習得と負の相関があった。着装習得が高い教員は高揚感が低く、教員と比べ着装習得が低かった学生は、教員より高揚感を強く感じていたと考えられた。教員は事前の知識が高く研修会という参加理由から学習に対する気構えが学生とは違っていたと思われる。教員は浴衣を着装して嬉しいという気持ちの高まりよりも、研修会で知識を増やすこと、しっかり着装を覚えるということに意識を集中させ着装の技能理解から着装習得に至ったと推察した。一方、学生は学びの場ではあるものの、浴衣着装を含むワークショップに参加し、楽しみながら学んでいた。その違いが興味関心への効果の現れ方に影響したと推察した。

着物の模様ワークや盆踊り体験も伝統文化への意識の変化に影響を与えた。学生は、事前では華道や茶道などの伝統文化に対する認知は高くなかったが、事後には学

びたい伝統文化として茶道が最も多く記述され、全体の約３分の１を占めていた。浴衣、盆踊り、風呂敷などの着物文化に関わる内容も挙げられていた。ワークショップの体験は、着物文化を一層学びたいと感じる経験になったと推察され、自国の歴史や舞踊などのタイ文化について関心を深めることにも貢献できたと考える。

4. 結論

本研究では、タイにおけるワークショップが現地の参加者の日本の伝統文化である着物文化に対する理解を深め興味関心を高められたか、参加者の日本理解と文化交流への興味を高められたかを検証することを目的とした。教員と学生の属性の相違に着目し、本教育プログラムの効果を検証した。

事前の調査からは、日本の文化についてポップカルチャーや和食を中心に認知度が高かったが、華道などの伝統文化に関しては教員のみ高かった。参加者は全般に浴衣や着物の着装経験も多く、全員がワークショップで着装したいと回答していた。着物文化への学習意欲も高く、特に学生の意欲が高かった。

事後の結果からは、着物文化への興味や着装技能の理解、着装技能の習得などで高い平均値が得られた。教員、学生ともに事後の着物文化への興味関心は高まったが、その効果の現れ方に相違が現れた。それは参加の背景が異なっていたためと推察された。

今回のワークショップの対象者は、浴衣の着装経験があり、さらに学習を深めるために参加していた。模様ワークや盆踊りという初めての経験を通して日本の着物文化に触れ、興味深く楽しむ様子が見られた。ワークショップで浴衣着装と講義のみでなく、盆踊りや模様ワークなど日本文化に触れる様々な体験が興味関心の向上に有効であることが示唆された。本ワークショップにより模様ワークなどを取り入れた着物文化への興味関心を高めるための教育プログラムは、日本人だけでなくタイの教員や学生にも効果があることが明らかとなった。

現在、新型コロナウイルスの世界的パンデミックにより教育界も甚大な影響を受けている。参議院常任委員会調査室の報告によると、111 の国・地域にある 424 大学のうち 59%でキャンパスが閉鎖され、3 分の 2 の大学でオンライン授業に切り替えられたという。教育のグローバル化において新たな手法の検討が必要とされている [6]。今後、本研究の文化の相互理解・交流においても効果のあった実践方法や内容を現在の環境の変化にどう対応させていくかを検討する必要がある。遠隔での展開を模索する等、時代に合った方法を検討すること、グローバル社会においてどのような手法でお互いの文化交流を進めるかを検討することが課題である。

5. 謝辞

本研究は「きもの文化の伝承と海外発信のための教育プログラムの展開」(代表：扇澤美千子)科学研究費補助金基盤研究(C)(一般)課題番号:16K00792(2016 年～2018 年)の助成により実施した。また、本ワークショップのために国際交流基金等助成金を申請して下さった高橋美紀氏らコンケン大学の関係の皆様に感謝申し上げる。

【引用・参考文献】

1) 薩本弥生、川端博子、堀内かおる、扇澤美千子、斉藤秀子、呑山委佐子；「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発―「きもの」の着装を含む体験学習と海外への発信―、服飾文化共同研究最終報告書、2-119、2012

2) 薩本弥生、井野真友美、川端博子、斉藤秀子；きもの文化の海外発信をめざした体験的教育プログラムの開発―米国の生徒・学生を対象としたゆかたの着装を含む授業実践―、横浜国立大学教育学部紀要.I、教育科学、35-42、2020

3) 大矢幸江、薩本 弥生；ゆかた着装授業と着装後ワークがきもの文化への興味関心に及ぼす効果、日本家政学会誌 69(1)、1-17、2018

4) 長崎 巌、弓岡 勝美；きものの文様図鑑、平凡社、2013

5) 大矢 幸江、薩本 弥生、張 バイバイ；和服文化の継承を目指した教育プログラム―ゆかた着装の有無と伝統模様ワークの検討―、教育デザイン研究、11、87-96、2020

6) 松井一彦；コロナの時代におけるグローバル人材育成―大学等を中心に―、参議院常任委員会調査室・特別調査室、立法と調査 No429、72-87、2020
https://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/rippou_chousa/backnumber/2020pdf/20201102072.pdf

YNU Repository Advanced published date: November 22, 2021